

# 現代フランス語における接続法の法的価値に関する 理論的研究

著者	佐藤 房吉
号	12
発行年	1969
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/14299">http://hdl.handle.net/10097/14299</a>

佐 藤 房 吉  
き とう ふさ きち

学位の種類 文 学 博 士

学位記番号 文 第 1 2 号

学位授与年月日 昭和 4 4 年 1 0 月 2 3 日

学位授与の要件 学位規則第 5 条第 2 項該当

学位論文題目 現代フランス語における接続法の  
法的価値に関する理論的研究

論文審査委員 (主査)  
教授 有 永 弘 人 教授 村 岡 勇  
教授 安 井 稔

## 論 文 内 容 の 要 旨

接続法が現代フランス語において、いかなる法的価値 *Valeur modale* を有するかは、現代フランス語統辞法のなかで、諸家の関心をもっとも強く惹いていると同時に、それらの見解がもっとも鋭く対立している問題でもある。Imbs は、「フランス語接続法に関する龐大な文献」の存在を指摘し、また、「学者から学者へと理論が変り、各々の学者が、接続法に対して、自分のシステム、自分の価値論を付与しているので、それらを検討しているうちに、根柢から懐疑的にならないようにするには、よほど確たる信念を持っていなければならないほどである。」と言っているが、状況を端的に示した言葉と言えよう。

本研究の目的は、このように錯綜し、相矛盾している接続法の法的価値の理論的研究に参加し、この法の法的価値はいかなるものと考えうるか、その客観的性格はいかなるものかについて、筆者の試論を呈出することにある。

### 第 1 部 接続法論の現状 — 分析と評価

もちろん、「法」の感覚を有しない言語を母国語とするわれわれにとっては、この問題の解決に立ち向うにあたって、他の外国人研究者とは、また異質の、より大きな困難をかかえていると言わなければならないであろう。従って、筆者は、フランス語を母国語とする研究者の主張、そ

の言語意識を度外視して、恣意的に理論を立てようとする愚を犯すつもりはないのであって、彼らの言語体験、言語感覚を十分に尊重しつつ、その上に別の光りをあてようとするに外ならない。第1部を現行接続法論の主軸の展望、その分析と評価にあてた所以である。

第1部は、これを2つの章に分ち、第1章においては、Brunot (*La Pensée et la Langue*) が、現代フランス語接続法論のなかで占める《分水嶺》的意義を明らかにした上で、即ち、現行接続法論を《Brunot以前》と《Brunot以後》とに分かちうることを明らかにした上で、《Brunot以前》の、即ち、フランス文法の諸規則が、典範化され、「文法」として定着した、18世紀末葉、殊に19世紀初頭の文法家の所説を分析評価しつつ、それが《Brunot以後》に対していかなる意義を有しうるかを指摘し、また、Brunotの項では、その説く、接続法的価値を有しない「文法的隷属 *Servitude grammaticale*」とする見解が、いかなる意味で閉鎖的であり、言語の生きた実態に合致しえないか、また、一方、それにもかかわらず、いかにして、この説が、その後の多岐をきわめる接続法論の導火線となりえたかを明らかにした。

第2章においては、現代フランス語接続法論の主流をなす諸家の説を分析、検討し、それぞれの説く、接続法を、「文法的冗語法 *Pléonasme grammatical*」(Bally)、「直説法第2形 *seconde forme de l'indicatif*」(Foulet)、「単に『考察』された行為 *action seulement "envisagée"*」(Clédât)、「心理的従属性 *subordination psychologique*」(De Boer)、「精神的エネルギー *dynamisme psychique*」(Le Bidois)、「願望と実在 *le postulé et l'existentiel*」(Wartburg & Zumthor)、「非判断 *non jugement*」(Damourette & Pichon)、「二極相関々係 *corrélation bipolaire*」(Imbs) とする見解について、何を肯定し、何を否定しなければならぬか、また、それぞれの所説が現代フランス語接続法論のなかで、いかなる位置を占めるかを指摘しつつ、終局的に残された問題の所在はいずこにあるかを明らかにした。

## 第2部 接続法の法的価値

第2部は、筆者自身の接続法論を展開した本論であるが、4つの章に分かれた、最初の章、即ち第3章は、「定義の設定」にあてられている。第1部における諸説の分析の結果は次の2点に集約される。即ち、第1には、主節乃至は独立節での接続法も、従属節での接続法も、唯一つの法的価値の《文法化》として、一元的な機能を持っていることを立証することである。なぜならば、独立節乃至主節での接続法と従属節での接続法を同質1個のものと見るか、異質2個のものと見るかは、《Brunot以後》の重要な争点であり、しかも、第1部での検討を通じて、二元論は本質的欠陥を含むことを知ったからである。そして、第2には、求めらるべき接続法の法的価値は、「不

「確實」乃至未成の事行を扱う接続法も、「確實」乃至既成の事行を扱う接続法をも、ひとしく摂取しうるものでなければならぬことである。——なぜならば、伝統的に語られ、そして、《Brunot以後》においてさえも1個の主流を形成している接続法＝「疑惑」の法という見解に拠る方向づけによっては、現代フランス語における接続法〔そこでは、確實、既成の事行も好んで接続法で示される。〕の客観的性格、その実態は到底解明しえないからである。そしてまた、《Brunot以後》の特色ある理論は、すべて、この点の考究に向けられていると言っていいからである。筆者は、その「定義の設定」——《仮説》としての定義の設定（第3章）——において、その出発点を、諸家の説がもっとも対立し、あるいは逡巡を見せている点においても、また、《既成》、《未成》の事行が併存し、しかも、主動詞の語義的拘束を一切まぬがれている点においても、さらに、そこでの接続法の使用が「隷属」的強制力を有している点においても、さらにまた、「そう古くからあるメカニズムではない」（Brunot）という点においても、要するに、あらゆる点において、現代フランス語接続法の問題点が悉くそこに集中しているかに見える「文頭の名詞節」（ex, Que cela soit vrai, je le veux : Que cela soit vrai, je l'ai appris hier,）における事例にもとめた。ここでの接続法は、あるいは単なる「隷属」（Brunot）であり、あるいは接続法の法的価値からもっとも遠く距たるもの（Wartburg & Zumthor）であり、あるいはまた「異例の」（Imbs）用法である。ひとり、Damourette & Pichonのみは、「恐らくは」という留保を付しつつ、ここでの接続法の理由を、「實在性の断定 *assertion actuelle* とは無関係に、事実の内容そのもの *Substance pure du fait* を文の土台 *Soubassement* として呈示している」ことに求めた。

筆者は、如上の、逡巡を含んだ Damourette & Pichon の指摘のなかに、かえって、現代フランス語における接続法の法的価値の本質を看取し、この直観的認識にもとずいて、まず、接続法は —— 現代フランス語における接続法は —— 《事行をその絶対値において、あるいは、純粹な乃至は絶対的な觀念 *Concept pur ou absolu* として呈示する法》であるという《仮説》を設定し、一方、その対立法としての直説法を、従来のように、「断定の法」（Clédat）、「現実性の法」（De Boer）、「實在と判断する法」（Damourette & Pichon）とするのではなく —— 直説法のこのような方向づけは、必然的に、接続法を「疑惑の法」へと導き、接続法論の混乱の原因は、一面、こうした直説法の定義のなかにもひそむと思われるが故に ——、これを、《事行を、それが、觀念であれ、状態であれ、事件であれ、報道 *information* 乃至は報告 *rapport* の直接的対象として呈示する法》と定義した。この定義は、Clédat が、「感情表現」に続く接続法について述べた、そこでの事行は「現実のこ

とと断定されているのではない。人はわれわれにそれを告げているのではない *on ne nous en informe pas* [下線筆者]」という言葉、また、Damourette & Pichonが、直説法について述べた、そこでの事行は、これを「行為者がその現実性を保証しつつこれを報告している。*le protagoniste rapporte en en affirmant la réalité* [下線筆者]」という言葉によって示唆された。

筆者が設定したこの仮説は、「文頭の名詞節」および、独立節での事例を含む周辺の事例に対して、きわめて良好な適合度を示した。そして、このことは、先に指摘した問題点のその一、即ち、独立節、従属節の接続法をひとしく摂取しうる一元的定義樹立の可能性を言示してくれたと同時に、一方で、それに対立するものとして、筆者が修正的に設定した直説法の法的価値との対立をとおして、一部の論者(Bally, Foulet)によって命令法と同一視された独立節での接続法は、命令法とは本質的に異なる統辞記号であり、後者は明らかに直説法圏のものであることをも教えてくれた。

そしてまた、筆者の行った、接続法——事行の純粹觀念化、直説法＝事行の、報道の直接的対象化という概念規定は、接続法とともに古く、《Brunot以後》においても重大な争点を形成した「従属性」の問題を、新たな視角から理解し直すことを許した。即ち、接続法を含む節は、それが「従属節」であれ、「独立」節であれ、常に《素材》的であり、これに対立して、直説法を含む節は、常に《要素》的であるという事実の発見である。

こうして、筆者は、その本論の中核をなす第3章において、接続法のすべての問題点を集約的に含むと思われる「文頭名詞節」における接続法の解釈に堪えうる定義の設定と、周辺事例への適合性の検証によって、筆者の《仮説》が、「定義」へと移行しうる可能性を有することを確信するとともに、語られてきたこと久しい接続法の「従属性」の本質が《素材》性であることをも明らかにしえた。

そして、そのような筆者の確信を客観的に実証し、仮説を定義へと定着させるため、第4章において、接続法が用いられる全事例について、筆者の仮説による事例の分析を行い、そのすべてについて、満足すべき適合度を検証しえた。即ち、《仮説》を「定義」へと移行せしめえた。なお本章、「副詞節」の項においては、近年、話語、文学語の領域を問わず接続法の使用が拡大し、注目と論議的となっている“après que”に続く接続法の意義について、特に一項を設けて詳細に検討した。

第5章は、条件法の問題にあてられている。この法は、接続法の競合法であると見做されている事実によって、従って、各論者の接続法論と密着している事実によって、独立した考察に値したからである。筆者は、Damourette & Pichonとともに、この「法」の本質が「時制」

的記号に属し、その意味では、「修正された直説法」(Imbs) であると考えが、しかし、Damourette & Pichon のように、条件法は「法としての何物をも有しない、〔下線筆者〕とは考えないが故に、Imbs が何らの説明も行っていない、その「修正」の度合と様態とを明らかにし、この「法」が、大半の事例においては、明瞭に直説法圏に属しつつも、一種の《溶解過程》をへて、「修正された」接続法的機能に達することを明らかにした。

最終章である第6章は、これを「形態」の問題にあて、「非時制的問題」の項においては、幼児や教養のない成人に見られる接続法の誤った活用形という事実の意義を考察しつつ、この事実が、かえって、今日の言語意識における、接続法の法的価値の活性の証左と考えることを指摘し、また、「時制的問題」としては、「19世紀に生じた重要な言語的事件」(Brunot) としての、接続法半過去のいわゆる「後退現象」の意義をさぐり、この現象は、接続法の法的価値の今日的位相と照応させる時、接続法の「時制」の《非時制化》、その「アスペクト」化につながってゆく性質のものであろうことを指摘した。

なお、次に、参考までに、「現代フランス語における接続法の法的価値に関する理論的研究」第1部、第2部の目次をあげておく。

## 目 次

### 序

#### 第 I 部 接続法論の現状——— 分析と評価

##### 第1章 《Brunot 以前》および Brunot

- § 1. 分水嶺としての Brunot § 2. フランス文法の定着期 § 3. Arnauld & Lancelot, Grammaire de Port-Royal § 4. L'abbé Girard, Les vrais principes de la langue française § 5. Condillac, Grammaire § 6. Girault-Duvivier, Grammaire des Grammaires § 7. Bescherelle, Grammaire nationale § 8. Brunot—「文法的隷属」

##### 第2章 《Brunot 以後》

- § 9. Bally—「文法的冗語法」 § 10. Foulet—「直説法第2形」 § 11. Cléd-at—「単に『考察』された行為」 § 12. De Boer—「心理的従属」 § 13. Le Bi-dois—「精神的エネルギー」 § 14. Wartburg & Zumthor—「願望と実在」 § 15. Damourette & Pichon—「非判断」 § 16. Imbs—「二極相関」

## 結 語

## 第Ⅱ部 接続法の法的価値

### 第3章 定義の設定

§17. 問題の所在 §18. 出発点としての「文頭の名詞節」一事行の《純粹觀念》 §19. 命令法との対立 §20. 《純粹觀念》化における不定法、無冠詞名詞との近親性 §21. 直說法との対立 §22. 接続法の《素材》性 §23. 内部的直說法圏の併置的《要素》性

### 第4章 接続法の用法における定義の検証

§24. 事例の分類 §25. 名詞節における接続法 §26. 「意欲」の動詞に続く接続法 §27. 「感情」の動詞又は述語、形容詞に続く接続法 §28. “*à ce que*” と “*de ce que*” の問題 §29. 「意見」、「認知」の動詞又は述語形容詞に続く接続法 §30. 「意見」、「認知」の動詞の否定形、疑問形に続く接続法 §31. 否定、疑惑の語義を持つ「意見」、「認知」の動詞に続く接続法 §32. “*le fait (l'idée) que*” 等 に続く接続法 §33. 形容詞節における接続法 §34. 「目的」を示す関係詞節での接続法 §35. 「最上級または類似の表現」に続く接続法 §36. 「否定」、「疑問」の主節に続く時 §37. 副詞節における接続法 §38. 「時間」を示す時 §39. “*après que*” の問題 §40. 「原因」を示す時 §41. 「目的」を示す時 §42. 「条件」を示す時 §43. 「比較」を示す時 §44. “*que je sache, je ne sache pas*” §45. 「譲歩」を示す時 §46. 「アルカイスム」あるいは「凝結接続法」 §47. 「法の辞索引」

### 第5章 条件法の問題

§48. 問題の所在 §49. 条件法の本質 §50. 「假定」と条件法 §51. 「譲歩」と条件法 §52. 「関係詞節」での条件法 §53. 「感情表現」の条件法

### 第6章 形態の問題

§54. 非時制の問題 §55. 「接続法半過去の後退」の意義

## 結 語

## 注

## 引用文献

## 論文審査結果の要旨

本論文は2部6章から成るフランス語統辞論中の接続法に関する研究であるが、その審査の結果、大要次のように報告することとする。

問題の要点は、現代フランス語において、接続法がいかなる法的価値 *valpur modale* を有するか、直説法を用いる場合との比較においてどのような差異を生じるか、法的要請はどのようにして生じるか等の問題を究明し、論者が最も妥当と考える解明と価値づけを提出することにある。まず第1部において、接続法論の現状を把握することから始め、ついでそれらの理論を分析、評価することによって、それぞれの理論に取捨選択すべきものがあることを理由づけようとする。

そのため論者は膨大な資料と取り組み、フランス語を母国語とする研究者の主張、その言語感、言語体験を尊重しつつ、その上にできるだけ公正な「別の光」をあてようと試みており、この複雑な問題の由って来るところを明示する。

第1部を「Brunot 以前」と「Brunot 以後」に分けた理由は、フランス文法の諸規則が典範化され、「文法」として定着するに至った18世紀末、殊に19世紀初頭の文法家の諸説が歴史的意義を持ちつつ、同時にそれが「Brunot以後」に対していかなる役割を演じたかを説き、閉鎖的性格を持つBrunot自身の「文法的隷属」説が言語の生きた実態にいかん即応しえない性質を持つものであるかを指摘しようとするためである。

「Brunot以後」においては、Brunotの閉鎖性にもかかわらず、その説がいかんにしてその後の多岐にわたる接続法論の導火線となり得たかを明らかにし、ついで、現代フランス語接続法論の主流をなす諸家の説を提示、分析、検討し、Bally, Foulet, Clédât, De Boer, Le Bidois, Wartburg & Zumthor, Damourette & Pichon, Imbsの代表的論旨について、それぞれの肯定さるべき点、否定さるべき点、またそれぞれが接続法論のなかで占める位置を指摘し、終局的に残される問題の所在をつきとめようとする。この部分の立論の一例として、Brunotの「文法的隷属」説に直接反論を掲げ、自己の接続法論を展開したClédâtの理論の検討(論文I, P. 40~54)の結語を引用しておく。

「結局Clédâtは、その理論においては前進的であり、新しい接続法論にとっての重要な布石を示しつつも、事例の分析の実際においては、もっぱら、語義の示す確実度に頼るという保守性を示し、この事実によって、かえって、『語義』的尺度は最終的に有効な基準とはなりえないことを教えてくれたのである。ただ、例外は、Brunotの場合と同じく、感情表現に続く接続法の分析であり、ここでは、事例の性質上、行為の確実度というまったく理論的基準には拠りえ



ない事情のため、彼の定義がもっともよく生きえたのであった。そして、そこから、われわれは、『既得の』あるいは『既知の』事行を扱う接続法という、現代フランス語接続法における中心的な課題を引き継ぐことになるのである。」(P. 53-54)

第2部「接続法の法的価値」において論者自身の立論が明示されるが、それを4章に分け、最初の章(第3章)で「定義の設定」を扱い、主節または独立節における接続法も、従属節における接続法も、唯一つの法的価値の《文法化》として、一元的な機能を持っていることを立証する。一元的と見るか二元的と見るかは、「Brunot以後」の重要な争点であったが、論者の一元論は、第1部の検討によって、二元論に本質的欠陥があることを知った論者の当然の主張である。第2の論点として、接続法が「不確実」または未成の事行を扱うときも、「確実」または既成の事行を扱うときも、ともに法的価値を持たねばならぬこと、ことに、接続法＝「疑惑」の法のような方向づけが接続法の客観的性格、その実態の解明に無力であることを明らかにし、この性格、この実態を明確にするのに真に役立つ事例は、「文頭の名詞節」(例：Que cela soit vrai, j'ò le veux. と Que cela soit vrai, j'ai appris hier.) であると考え。それは、「定義の設定」にあたって諸家の説がもっとも対立し、または逡巡を見せているのが「文頭の名詞節」においてであり、さらに「既成」、「未成」の事行がともに可能であり、しかも主動詞の語義的拘束からもまぬがれており、接続法の使用が「隷属」的強制力を持っており、「それほど古くからあるメカニズムではない。」と Brunot の言う特性を持っていて、要するに現代フランス語接続法の問題点を悉く集中して持っているのが、この「文頭の名詞節」であると論者は確信するからである。

ここでの接続法の使用について、諸家の説は区々であるが、論者は Damourette & Pichon の説を重要視する。それは、「実在性の断定 *assertion actuelle* とは無関係に、事実の内容そのもの *substance pure du fait* を文の土台 *soubassement* として呈示している。」というのであるが、この説が「恐らくは」という留保つきであることに論者はあきらまず、むしろこの指摘の中にこそ、かえって現代フランス語における接続法の法的価値の本質があり、この認識にもとづいて、接続法は「事行をその絶対値において、あるいは、純粋な、乃至は絶対的な観念 *concept pur ou absolu* として呈示する法」であるという仮説を設定し、一方、その対立法としての直説法を、「疑惑」と対立するような方向へは押しやらずに、「事行を、それが観念であれ状態であれ事件であれ、報道 *information* 乃至は報告 *rapport* の直接的対象として呈示する法」と定義する。この定義は、Clédât の接続法論にある「人はわれわれに告げているのではない。」とする考え方、Damourette & Pichon が直説法について述べた一文、「発言者がその現実性を保証しつつこれを報告する。」とによって示唆され

ている。

以上のような接続法についての「仮説」が実際の検証にあたってどのような効果を示したかについて、論者は「良好な適応性」を示したといっており、前述の一元的定義樹立の可能性を示したほか、直説法の法的価値との対立をとおして一部の論者(Bally, Foulet)によって命令法と同一視された独立節での接続法が、命令法とは本質的に異なる統辞記号であり、後者は明らかに直説法圏のものであることも教えてくれたと報じている。

論者のこの概念規定(接続法=事行の純粹觀念化; 直説法=事行の、報道の直接的対象化)はまた、次の事実(これは「Brunot以後」においても重大な争点となった「従属性」の問題を、新たな角度から理解することとなったが)、(接続法を含む節は、それが「従属」節であれ、「独立節」であれ、常に《素材》的であり、これに対立して、直説法を含む節は、常に《要素》的であるという重要な事実の発見に導いている。

こうして論者は、その「仮説」が「定義」へと移行しうる可能性を有することを確信するとともに、語られてきたことまことに久しい接続法の「従属」性の本質が、ほかならぬ「素材」性であることをも明かにしている。

このようにして第4章は、論者の確信の客観的実証と、仮説の定義化に充てられる。そのためには接続法が用いられる事例全体について、事例の分析を行ない、そのすべてについて満足すべき結果を検証した。なお「副詞節」の項において、近年、話語、文学語を問わず接続法の使用が拡大されて注目と論議的となっている。《après que》に続く接続法についても、この観点から特に一項を設けて詳細に検討している。

後続の第5章は、接続法との競合法と考えられる条件法の検討に充てられているが、論者は、Damourette & Pichonの「時制的記号」説とImbsの「修正された直説法」説から出発しつつも、「法としての何物も有しない。」とする前者の考え方をしりぞけ、後者の「修正」corrigéの意義をその度合いと様態について明らかにし、条件法が明らかに直説法圏に属しつつも、一種の《溶解過程》を経て、「修正された」接続法的機能に到達するものとする。

最終の第6章は、「形態」の問題にあてられ、接続法の誤用(幼児・未教養人)に光をあて、この事実こそ、かえって今日の言語意識における接続法の法的価値の証左となりうることを認める。このことは時制には関係がないが、別に、19世紀以降の接続法半過去の「後退現象」の意義をさぐり、この現象を接続法の法的価値の今日的位相と照応させることによって、接続法の、《非時制化》、その「アスペクト」化につながって行く性質のものであろうと考察している。

本論文は、その第1章において問題の現状把握と分析評価を行ない、第2章において仮説の設定と検証を厳密に行ない、従来長年の間多岐にわたった解決困難な問題に、首肯さるべき結論を

与え得たものと考えられる。この結論が接統法の定義樹立に貢献することは、なお今後の問題といえよう。しかし本論文の与えた定義は、今後学界に対して有力な資料となることは疑いを容れぬところであり、同時に、特にその第2部第3章に掲げられた「無冠詞名詞」との親近性、接統法の《素材性》等の考察の独創性の価値は高く評価さるべきものであろう。

本論文の趣旨は、その要点のみを取り上げてもきわめて明快であり、学習者・研究者にとって裨益するところ少なくないであろうことを付記する。

なお、上記委員は、提出者が大学院博士課程修了者と同等以上の学力を有することを確認した。以上審査するところによって、本論文の提出者は文学博士の学位を授与されるに充分の資格があると認められる。

昭和44年 月 日